
デジモン×恋姫?無双 電腦大戦 正月記念第一話先行公開

超人カットマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモン×恋姫？無双 電腦大戦 正月記念第一話先行公開

【Nコード】

N0298BA

【作者名】

超人カットマン

【あらすじ】

先日発売が決定されたポケモンの最新ゲーム。それを真似て考えました。後悔は無い。正月記念で第一話を先行公開します。現代の三姉妹と、デジモン達と無双の姫たちのイクサが始まる。

第一席 三姉妹、異世界に飛ばされること（前書き）

今回の舞台は、デジモンと人間が暮らす中国三国時代に良く似た世界。ここではデジモンと人間は共に暮らし、今はデジモンとデジモンをパートナーにする武芸者が争う戦国時代となっている。

そんな中、異世界から三人の少女がやって来る。彼女たちはこの世界で何をするのか。

第一席 三姉妹、異世界に飛ばされること

空は暗雲で覆われ、大地はかれた世界。そこを進軍する軍団がいた。装備も兵士も様々なこの軍団、これより最後に残った土地を侵略に行くのだ。

「大王しゃまー！このままじゃ南蛮もおしまいですよー！！」

虎ネコのような服装をした少女が、隣で様子を見ている露出度の高い服装をした。頭にネコ耳のアクセサリを付けた女性に言った。

「バグラ軍、この国はおるか、世界すべてを戦乱に巻き込むつもりなの。」

女はこう言って歯噛みした。本来なら自分たちが戦って追い返すのだが、今ではバグラ軍なる軍団は自分たちの全兵力を持って戦ってもとても太刀打ちできない勢力になっているのだ。

この絶望的な状況に、一人の救世主が現れた。

「あきらめちゃダメ！！」

現れたのは、赤いマイクのような機械を持った桃色の髪の少女である。その隣には、頭にV字型の角を付けた赤い小竜。青いカブトムシのような機械。頭部と尾の先にドリルを付けた超大型犬。星のような形をした謎の生き物、が侍り、その後ろから明らかに人ではない生命体が軍を率いて現れた。その様子はとても勇壮であった。少女はマイクのような機械を掲げると、

「モン、モン、モン、デジ　　！！」

と叫んだ。すると、彼女の近くに侍っていた生命体が合体し、一人の巨人となった。その巨人が持っている剣を振り上げ、勢いよく振り下ろし敵兵を吹っ飛ばしたのを合図に、少女の後ろの軍も飛び出し、敵軍と交戦を開始した。

「やった！あれこそ伝説の英雄、御使い様桃香！！」

女がこう言った時である。

「起きるのだ!!!!!!」
赤い髪を短く揃えた少女が、ベッドで寝ている桃色の髪の少女の耳元で叫んだ。

「うう、鈴々ちゃん。耳元で叫ばないで……」

少女は耳を押さえながらベッドから出てきた、

「そんな事より、今日は愛紗を応援しに行く日なのだ!!」

まだ割と朝は早い、鈴々と呼ばれた少女はもう既に着替えて勢い込んでいる。少女は目覚まし時計をみた、

「ええ!!もうこんな時間!!」

少女はこう言って飛び上がると、大急ぎで着替えた。因みに彼女の名は「桜井桃香」この話の主人公である。そして鈴々と呼ばれている少女は、桃香の妹「桜井鈴」である。鈴々とは、彼女の一人称であり呼称である。

「それじゃあ、いつてくるのだ!!」

鈴は、桃香が着替え終わった途端、桃香を連れてダッシュで家を出た。

「いつも割と寝起きいいのに!!」

鈴にこう言われた桃香は、

「変な夢みたからかな。なんか変にリアルだっけ。」

と、返した。

「そうなのだ。凄い真剣な顔で寝言を言っていたのだ。なんたらモンとか、デジかんとか、って。」

鈴は桃香にこう訊いた、どんな夢を見ていたの、と、

「うーん、鈴々ちゃんの絶叫でほとんど忘れちゃった。」
桃香はこう答えながら、見ていた夢の内容を思い出していた。
（でもなんだったんだろう。戦争してるみたいでなんかこわいけど、でもとてもワクワクするような）
桃香はこう思ったが、何か心当たりがあるわけではなく、結局ただの偶然と考えた。
しかしこの時は気づいていなかった。これから夢で見たような戦いを経験することになると。

「それでは、聖フランチェスカ学園対江東区高等学校、薙刀競技大将戦を行います！」

会場の武道館には各校の応援団が入り、緊張感があふれていた。その会場に、桃香と鈴はそこにいる。

「愛紗！頑張るのだ！」

鈴は小さい声で応援した。

そして試合は、大将戦らしく白熱した展開となり、最終的には聖フランチェスカ学園の大将が勝利した。

「やったー！！」

桃香は両手をあげて喜びたい気分になった。確かに彼女は聖フランチェスカ学園高等部の生徒会に所属しているが、喜ぶ理由はそれだけではない。

聖フランチェスカ学園薙刀部の大将を務めた「関口愛紗」は、桃香と鈴の従姉であると同時に、幼馴染なのだ。

「おい、愛紗ー!!」

競技終了後、桃香と鈴は愛紗の元へ行つた。

「おお鈴々、それに姉上。」

「もう愛紗ちゃん。今更姉上なんてやめてよ。」

愛紗は、桃香と鈴の姿を確認すると、手を振って答えた。常に凛々しく、古風な口調をしている愛紗は、男子はともかく女子に大人気である。

「別にいいのだ、桃香お姉ちゃんは愛紗にとつてもお姉ちゃんなんだから。」

入口で合流した三人は、その場でしばらく世間話をした。その様子は、とても仲の良い姉妹のようである。その様子を見て、

(ああ、私のお姉さまと仲良く、羨ましい)

と思つている、聖フランチェスカ学園の女子生徒がいたとかいないとか。

そして、聖フランチェスカ学園雑刀部全国大会出場のお祝いに、どこかで何か食べて行こうという話になつた時、桃香の頭に不思議なメロディーが流れた。

「あれ、どうしたのだ桃香お姉ちゃん？」

鈴が心配そうになつて顔を覗き込んだが、

「静かにして！」

桃香はこう言つて、耳を澄ませた。すると、

「ここまでか、未来のキングがざまあねえな。」

苦し紛れにこう言う声が聞こえた。

「ねえ誰？ 苦しいの、助けがいるの？」

桃香は思わずこう言って走り出した、

「どうしたのだ。」

「え？姉上？」

鈴、愛紗は驚き、慌てて後を付いて行った。

「どこから話てるのか知らねえが、この辺りはもうすぐバグラー軍に制圧される。危険だぞ。」

声の主はこう言ったが、

「危険でも、私はあなたを助けに行く！！」

桃香はこう言っただけで聞かなかった。

「ただだけお人よしなんだよ。というかどこから話して……」

声の主はこう言った途端、

「危ねえ！いったん止まれ！！」

と、桃香に言った。桃香が言われた通り止まったら、頭上から車が降って来た。後から付いて来ていた鈴と愛紗は驚いた、

「空から車が?!」

「でも凄い反射神経ですね！姉上!!」

しかし桃香は、

「違うの、今は。」

と言った。その時、

「よお、助かったみてえだな。まったく、人の心配ばかりして周りが見えなくなってるいや世話ねえよ。」

と、声が聞こえた。その時桃香の目に、一瞬であるが傷ついた赤いトカゲのイメージが映った。

(今のイメージ、人間じゃないの?)

桃香はこう思ったが、

「それはお互い様でしょう。」

と返すと、

「ハハ、違くないな。」

声の主はこう言って、咳込んだ。その時、声の主の声がどこから聞こえてきてるのか分かった。

「あそこだ！」

桃香はこう言っつて、ある電子機器を扱う店の隣の路地裏に入った。そしてそこで、赤く光る音の塊を見つけた、

「なにこれ、光？」

「ううん、これは音なのだ。」

愛紗と鈴は何なのだ、と思った。

「この子、今にも死にそうなの、それなのに私の事を助けてくれて。」

桃香がこう言っつと、

「一体何を言っつているのですか?!」

「桃香お姉ちゃんがおかしくなっつちゃっつたのだ！」

二人はそろっつてこう言っつた。その時、

「そのメロディーを救いたいのか？」

三人の耳に、こう言っつ声がか聞こえてきた。

「ならばこのクロスローダーを手に取り、その主となるがいい。失われたメロディーを録音し、再生することができる。」

この言葉と一緒に、赤いマイクのような機械が現れた。

桃香がこのマイクを手に取りようとした時、

「ちよっつと待っつて下さい。何が起こるか分からないのに。」

「首を突っつ込む必要はないと思っつうのだ。」

二人はこう言っつて桃香を止めようとしたが、

「ううん、今ここで助けられなかつつたことを後で後悔したくないから。」

桃香はこう言っつて、赤い機械を手に取りつた。すると、赤く光る音の塊が機械の中に入り、次の瞬間足元に大穴が開いた。

「ええ?!?!?!」

「言わんこつちやないのだー!!」

桃香は勿論、鈴と愛紗も巻き込まれの形で大穴に落ちて行つた。

そして、どこか別の場所の空に現れた。

「どこなのだー!!」

三人はそのまま落ちていき、空を飛んでいた戦闘機のような生き物、大きい象のような生き物、武器を持った風船のような体をした兵士の順番でぶつかりながら落ちた。

「何い、空から人間の娘だと!」

「アニキ、しかも面妖な服装をしますぜ。」

中には人間もいて、桃香たちをみてこう言った、

「魏の曹操、江東の孫策か?」

親玉と見られる男がこう言うと、

「何か違いますけど、怪しいから始末しましょう。」

と、小柄な男が言った。その途端、一斉に兵士たちが射撃を始めた。

「うわああ!撃つて来たのだ!」

三人が大慌てで逃げ出すと、

「ハハハハハ、いきなり敵陣と真ん中とは、なかなかロツクな展開じゃねえか!」

桃香の持つているクロスローダーから声が響いた。その声は桃香が聞いた声で、今は元気になっている。

「まあ雑兵だ。俺が始末してやる、クロスローダーを掲げて俺をリロードしてくれ!」

声の主はこう言ったが、

「どうすればいいの?」

桃香はどうすればいいか分からないので、声の主に訊いた、

「俺の名前を呼べばいい。」

声の主はこう言った、しかし、桃香は彼の名前を知らない。
「分かるはずだぜ桃香、あの場で俺の声が聞こえたんだ！」
声の主はこう言った。その時、桃香は思い出した、自分の見た夢の
中にこの声の主が居たことを、
「リロード！シャウトモン！！」
桃香がクロスローダーを掲げて叫ぶと、中から頭にV字型の角を付
けた赤い小竜が現れた。

一方遠くにある小さな村では、
「庄屋様！それにジジモン様！あの光。」
頭が花の花びらで出来た帽子のような物を被った少女が、近くに
いた恰幅のいい男と、白いひげを沢山蓄えた老人に言った。
「シャウトモン、生きててくれたか。」
庄屋と呼ばれた男は、その光を見ながら言った。

そして、その現場では、

「よっしゃあ！行くぜ観客共、ラウデイロツカー！！」
オーディエンス

シャウトモンはこう叫んで、マイクのような形状の武器を振り回し暴れはじめた。これにより数多くの兵士がふっ飛ばされた。

「くっそ！なんて強さだ！」

「ひるむな、人間だけでも始末しろ！」

親玉と思わしき男と、その隣の大柄な男の指示を受けた兵士たちは、戦車のような生き物を前に出して、砲撃を行った。

放たれた弾が当たろうとした瞬間、何かが現れ三人を庇った。

「待ちかねたぜ相棒！」

「遅イゾシャウトモン。」

新しく出てきた青いカブトムシのような機械を見た時、桃香は思った。

（彼は確かバリスタモン。砲弾をまともに受けてほぼ無傷なんて、とても頑丈なんだ）

そして二体は息を合わせると、

「ソウルクラツシャー！！」

「ヘビースピーカー！！」

互いの得意技を放った。この一撃は他の兵は勿論、象のような生き物も吹っ飛ばした、

「凄いのだ、あんな大きい奴も一発で。」

三人が驚いていると、

「何やら強力なデジモンが暴れていると聞いたが、シャウトモン、お前達だったか。」

紫色のライオンのような姿の怪物が現れた、

「ちっ、病み上がりには手ごわい相手だな。」

シャウトモンはこう言って、

「気を付けな、こいつはさっき俺の命を奪いかけたやつだぜ。」
と、桃香たち三人に告げた。

「まあいくら追い払っても湧いて出るのがハエと言うもの。このバグラ軍桃花村方面侵攻部隊司令官マッドレオモンが、いくらでも引

導を渡してくれる！」

マッドレオモンはこう言うと、高速で動き回りながら鋭い爪で桃香たちに襲い掛かった。だが、バリスタモンが庇う事で三人に攻撃は来なかった。

バリスタモンは攻撃の合間に反撃を行ったが、マッドレオモンの素早い動きには追いつかなかった。

「くたばれ!!」

マッドレオモンは再び桃香たちに向かっていったが、次はシャウトモンが止めた。しかし、簡単にふつとばされてしまった。

「このままじゃやられちゃうのだ!!」

鈴はこう叫んでいるが、

(大丈夫、彼の力はこの様な者じゃない。だって彼らは)
桃香はこう考えていた、そして、

「二人とも、私の作戦で動いてくれる？」

と、シャウトモンとバリスタモンに訊いた、

「ああいいぜ！」

シャウトモンがこう答え、バリスタモンが頷くと、

「シャウトモン、バリスタモン、デジクロス!!」

クロスローダーを掲げて叫んだ、

「何い、デジクロスだと!?あの選ばれたものにしか使えないと言われる伝説の力を?!」

そして現れたのは、バリスタモンの胴体にシャウトモンの角が頭部についたデジモンだった。

「シャウトモン×2!!」

現れたデジモンは元気よく名乗った。その姿を見て、

「おお、かっこいい!!」

と、愛紗は言い。

「いや、微妙なのだ。」

と、鈴は言った。しかし桃香は、

「何か違う、なんで？」

と言った。一方マッドレオモンは、

「ク、ハハハ、バリスタモンにシャウトモンを収納しただけじゃないか。噂には尾ひれがつくとはいえ、伝説のデジクロスの力がそんなに粗末な物だったとは。」

こう言つて襲い掛かった。しかし、シャウトモン×2は素早い動きで攻撃を回避すると、マッドレオモンを捕まえた。

「バカな、何故貴様等雑兵ごときにこれほどの力が。」

シャウトモン×2は、こう言っているマッドレオモンを持ち上げながら言った。

「よく魂に刻みな、俺の叫びを!!」

そして、腹部のバリスタモンの頭部から、お互いの息を合わせないと放てない破壊光線「バディブラスター」を放ち、マッドレオモンを上空へ撃ち上げた。

その様子を見ていた者が遠くに居た、

「見ました詠様!こんな辺境のデジクロスの使い手が!」

頭がテレビのような忍者が、近くにいたメガネをかけた少女に言った。

「へえ、こんなところにいたんだ。千年に一度の神器。」

少女はこう言った。因みに、千年に一度に神器というのは、彼女が勝手に言っていることである。

また、戦場の様子が見える峠道では、赤い服を着た黒髪の女性が馬の上からその様子を見ていた。

「どうした？姉者？」

後ろからやって来た水色の髪を短くした女性が、姉者と呼んだ女性に訊いた、

「あれを見る秋蘭、華琳様や袁紹、孫策以外にもデジクロスの使い手が。」

女は、戦場の方向を指差して言った。

また別の場所では、

「あれは曹操の軍でも袁紹の軍でもない、ましてや私たちでもない。」

紫と赤が混ざった色合いをした軽い服装に身を包んだ長い黒髪の少女が、戦場の様子を見ながら言った。そして、

「オポッサモン！戻るよ、急いで孫策様に報告するよ。」

別の枝に居た、帽子をかぶり風船を持った猫のような生き物に言った。

そして、問題の戦場では、

「いやー、凄いぜ桃香、俺はお前に惚れたぜ!!」

シャウトモンが桃香にこう言っていた、

「お前なら俺をキングにしてくれる。」

そして、俺と一緒に天下を取ろうと言うと、

「ダメなのだ、鈴々達はこれから家に帰るのだ!」

鈴がこう言って止めた、

「何だよ細けえ姉ちゃんだな、自分からやって来てどこに帰るんだ？」

シャウトモンがこう訊くと、

「東京なのだ!」

と、鈴は答えた。しかし、

「ソレハ一体ドコノ事ダ?」

バリスタモンはこう訊いて、

「ココハ桃花村ダゾ。」

と、言った。

「だからどこなのだー!!」

桃香、鈴、愛紗の知らない世界の空に、鈴の声が響いた。

第一席 三姉妹、異世界に飛ばされること（後書き）

注意

この小説は正月記念の特別公開作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0298ba/>

デジモン×恋姫?無双 電腦大戦 正月記念第一話先行公開

2012年1月1日01時50分発行